

北原白秋作 JASUI Joŝio 訳 Ĉi tiun vojon*¹ (この道) の感想

切替英雄

2012年3月17日の札幌エスペラント会の総会に後藤純子さんがお持ちになった JASUI Joŝio 訳 Ĉi tiun vojon (Traduko1. 北原白秋「この道」のエスペラント訳) について感想を述べます。また、あわせて改訳の試みを示します (Traduko2)。

Originalo	Traduko1	Traduko2
この道	Ĉi tiun vojon	Ĉi tiu vojo
1 この道はいつか来た道 ああ そうだよ あかしゃの花が咲いてる	Ĉi t <i>iu</i> n v <i>o</i> jon mi c <i>er</i> te <i>iris</i> íam. Ho, j <i>és</i> , mi <i>iris</i> íam. Jen flóras <i>ákac</i> ioj, ja s <i>á</i> me kiel t <i>í</i> am.	Ĉi t <i>iu</i> n v <i>o</i> jon mi c <i>er</i> te <i>iris</i> * ² íam. Ho, j <i>és</i> , vi <i>é</i> stas práva. Jen flóras <i>ákac</i> ioj,* ³ ja s <i>á</i> me kiel t <i>í</i> am.
2 あの丘はいつか見た丘 ああ そうだよ ほら 白い時計台だよ	Mont <i>é</i> ton t <i>iu</i> n mi c <i>er</i> te v <i>id</i> is íam. Ho, j <i>és</i> , mi v <i>id</i> is íam. Jen blánka hórloĝtúro, sen <i>ŝ</i> ánĝe kiel t <i>í</i> am.	Mont <i>é</i> ton t <i>iu</i> n mi c <i>er</i> te v <i>id</i> is íam. Ho, j <i>és</i> , vi <i>é</i> stas práva. Jen blánka hórloĝtúro, sen <i>ŝ</i> ánĝa* ⁴ kiel t <i>í</i> am.
3 この道はいつか* ⁵ 来た道 ああ そうだよ おかあさまと馬車で行ったよ	Ĉi t <i>iu</i> n v <i>o</i> jon mi c <i>er</i> te <i>iris</i> íam. Ho, j <i>és</i> , mi <i>iris</i> íam. Mi s <i>ón</i> ĝe kun patrino kalé <i>ŝ</i> e <i>iris</i> t <i>í</i> am.	Ĉi t <i>iu</i> n v <i>o</i> jon* ⁶ mi c <i>er</i> te <i>iris</i> íam. Ho, j <i>és</i> , vi <i>é</i> stas práva. Ni kún patrino kára kalé <i>ŝ</i> e <i>iris</i> t <i>í</i> am.
4 あの雲もいつか見た雲 ああ そうだよ さんざし 山査子の枝も垂れてる	E <i>ĉ</i> t <i>iu</i> n n <i>u</i> bon mi c <i>er</i> te v <i>id</i> is íam. Ho, j <i>és</i> , mi v <i>id</i> is íam. E <i>ĉ</i> h <i>er</i> boj dé l' kratágo sinkl <i>ín</i> e kiel t <i>í</i> am.	E <i>ĉ</i> t <i>iu</i> n n <i>u</i> bon mi c <i>er</i> te v <i>id</i> is íam. Ho, j <i>és</i> , vi <i>é</i> stas práva. La brán <i>ĉ</i> oj dé kratágoj sinkl <i>ín</i> as kiel t <i>í</i> am.

*¹ 詩のタイトルを akuzativo ではなく、nominativo の Ĉi tiu vojo とするのにも一考の価値があります。私は nominativo の方がいいような気がします。

翻訳というのは原作者の想いを伝えるものでなければなりません。韻文でそれをするのは大変難しいことですが、せめてできるだけもとの想い（原作者が抱き、伝えたかった想い）に肉迫しつつ、かつエスペラント詩として美しいものに仕上げなければなりません。

JASUI Joŝio の翻訳の最大の欠陥は、この詩が二人の対話で構成されているということをまったく考慮していないことです。というよりも、この詩が創造したたぐいまれな時空間を考察することなく、日本語をエスペラントに置き換えた可能性が高い。文芸作品を含むあらゆる人文的現象に絶対の解釈ということはないから、この訳詩のとおり、「この道」が白秋の問わず語り、あるいはつづやきであるとしてもまったくの誤りと断定はできない。しかしそれならばこの詩の立体性がまるでなくなってしまう。

二人の対話。二人とは、三連目に「おかあさま」とありますから、仲のいいきょうだいに違いありません。ここまではほぼ確かなことです。この確かな事実からこの詩の美しさと感動が生まれるのです。

そこから、次のようなことがたぶん言えると考えます。

各連の一行目は年下の言葉。二行目、三行目を言うのは年上。仮に年下を弟とし、年上を姉とします。最初にこの道をたどったのは、もうだいぶん以前のことで、弟は当時まだ幼く、ぼんやりとした記憶しかない。姉はそのとき、もうしっかりしたお姉ちゃん、はっきりとした記憶が残っている。そのときは母に連れられ三人で来たのですが、今回はもう母は亡く、成人した姉・弟二人の旅です。この詩には今は亡き母を偲ぶ、という重要なモチーフが隠されていると感じられます。

そこで、姉の言葉「ああ そうだよ」を Ho, jes, mi iris iam などとするのは不可で、mi「わたし」を ni「わたしたち」にしなければなりません。さらにいえば、記憶の確かな姉の言葉ですから、この行の iam「いつか」は宜しくありません。

同じように第三連の Mi songe kun patrino ... の Mi も Ni となります。

次に、上述のことのほかに是非とも改訂の要のあることを述べます。

第三連の Mi songe kun patrino ... の綻びは、Mi を Ni に直したところで、繕うことができません。この弟と姉は、かつて母と三人で実際に馬車でこの道をたどったのです。馬車で行ったのは夢の中のできごとではないのです。なるほど過去は常に夢のようなものです。この詩全体も夢のようなものではありませんが、馬車に揺られたのは過去の事実なのです。詩全体が夢ならば、夢

*1 原詩どおり vénis でもかまわないと思われます。iris, vénis いずれにせよ ĉi tiun vojon は akuzativo de direkto (方向を示す対格。例 *iri Parizon*) ではなく、akuzativo de trajno (経路を示す対格。例 *iri ŝtonozan vojon*) です。あえて iris とした訳詩者の気持ちを忖度するなら、原詩どおり vénis とすれば、akuzativo de direkto ととられることを恐れたに違いありません。わたしもそのように誤解する人があるかと多少の不安を覚えますので、訳詩者にしたがっていいのではないかと考えます。

*2 この詩の「あかしや」はハリエンジュ(ニセアカシヤとも)。

*3 senŝang- は horloĝturo の属性ですから、-e ではなく、-a にしました。-e であると staras tie などと続くこととなります。

*4 「いつは」となっているがこのように直します。

という虚の世界の中の事実なのです。ですから、なんとしても songe 「夢で」という語があってははいけません。

第四連の herboj が不可なのは議論の余地がありません。herboj は「草」です。山査子^{さんざし}は人の丈と同じくらいな低木ですが、草ではありません。秋に黄色の実を結ぶので、その重みで枝 branĉoj が垂れているのでしょうか、私は見たことがありません。残念です。内地では庭木とするそうですね。

第三連の

Mi sǒngē kún patrino ...

は、sǒngē をやめて、

Ni kúne kún patrino ... あるいは、 Ni kún patrino kára ...

にするのが適当と思われます。もちろん kúne 「いっしょに」より kára 「大切な」のほうが良いでしょう。kune kun は冗長であるし、何よりも「おかあさま」とごく上品に言っていますから、その気持ちを伝えたいものです。

第四連の

Eĉ herboj dé l' kratágoj | sinklíne*⁷ kiel tiam.

は、

La branĉoj dé kratágoj | sinklínas kiel tiam.

とすべきです。

各連が三行とも íam と押韻されています。余りにも単調です。思ってもみてください。聴き手はすべての行で、計 12 回も íam を聞かされるんですよ。原詩の構成は素朴さ、単純さを装ってはいますが、実は極めて洗練されています。このような愚かしいモノトーンとは無縁です。

脚韻は、意味に関してまったく無関係な語の最後のアクセントがある母音以下の一致となるべきです。音と意味をともに一致させるのは禁じ手です。音だけを一致させなければなりません。iam 「いつか」と tiam 「そのとき」は違う意味ではないか、というかもしれませんが、ともに korelativa tabelo の中の語ですから、意味的關係は大いにあります。

*⁷ sinkline は不可解です。ここは何も普通に述語にすればいいのです。(後にこの訳詩をタイプした人の誤りであることを知る。)

なんとかこの単調さから救い出さなければなりません。いま、余裕がなく成案はありませんが、各連二行目の姉の言葉「ああ そうだよ」を

Ho, jés, mi íris íam. あるいは Ho, jés, mi vídis íam.

などとせずに、白秋が歌ったとおり

Ho, jés, vi éstas práva.

とすれば、monotoneco に陥ることから多少とも救われますし、なによりうれしいことに、白秋の想いがなんの造作も作為もなくそっくり取り込めます（vi estas prava 「おまえの言うとおり」）。また先に述べました姉の言葉にある iam の不自然さが解消されます。

ただし各連の一行目と三行目がへたくそな脚韻をとどめています。

以上不完全ではありますが、私の感想といたします。

30-a de aprilo, 2012. Kirikae H.

